

office空と海
平井 吉信

中小企業診断士

平井吉信 コーナー

イシマササユリの季節

本土から見て離島には「わくわく」がある。県内で最初に魅力に取り憑かれたのは出羽島（牟岐町）。亜熱帯の植物、シラタマモと呼ばれる原生生物、手頃な料金の連絡船、クルマを置ける場所があることなどから二十代の頃に訪れて以後、島の案内を行う無償ツアーを何度か個人で行つた。牟岐大島は連絡船がないこともあって訪れる機会がなかったが、一度調査に同行させてもらつたことがあつた。島の入江に船を停めて湾内周辺を見ただけであるが、無人島の豊かな生態系に心をひかれた。ただし、牟岐大島に限らないが、気を付けることがひとつ。それは草むらに足を踏み入れるときは、肌を極力露出させず、防虫スプレーなどでダニ対策をしておくこと。

この島を楽しむには2～3時間では足りないことは明らかなので、答島港から10時台の第2便で渡り、16時台の最終便で戻ることにした。

さて、県内の離島のうち、四国の最東端に位置し、一日3便の船で接続する阿南市の伊島は出羽島よりも面積は広い。港の周辺に集落があり、島内を走るクル

マはない。この島を有名にしているのは「イシマササユリ」である。その花が咲く時期に合わせて「伊島芸術祭2015 もよみつり」が開かれ、期間中は連絡船が1日4便に増便される」と聞いたので訪れてみた。

事前の情報収集で島の地図もしくは絵地図（紙媒体やパンフレットはある）がWeb上に見つからなかつた。PDFで置いてもらえると訪問の際の時間の計画が立てやすい。どこに、どのぐらいいの距離で、どんな散策路なのかを知つておいて船の時間に間に合わせたい。

階段を上がりきると、伊島でもつとも雄大な風景「カベヘラ」の眺めが見物。海岸が水面に向かつて傾斜するめずらしい地形を辿つていくが、崖に行き当たつて足止め。遊歩道に戻つて北に進むと島の中央部に木々が生い茂る貯水ダムがあり、さらに島のへそに当たる地蔵峠がある。ここは、港の集落へ降りる近道、灯台へ上がる道、北西に広がる湿地に降りる道、最北端の觀

れる。徳島県はタキユリ、ジンリョウユリなど稀少なユリの宝庫で、イシマササユリもササユリの変種で固有種である。かれんなジンリョウユリ、コケティッシュユナタキユリと比べると、素朴な田舎娘という趣。それゆえつくりものではない天然の愛らしさが感じられてドキドキする。かつては島中に咲き誇った花も乱獲や人の手が入らなくなつて減少したという。いまでは地元の小中学校、高校が協力して保護を行つている。

船が港に入るとイベント会場があり、地図やウチワを配つていて（ウチワの意味はそのうちわかる）。学校の前を通り過ぎて山道を進むと階段があり、最初のイシマササユリが迎えてく

音堂へと伸びる散策路が交わる要所。観音へ向かう道中にはミニ靈場が設けられている。

観音堂が近づくと散策路が少し荒れてくる。島の北端に位置するお堂に辿り着いたら今度はくるりと南西に向きを変え湿地に向けて降り始める。昼を過ぎているので小休止を入れたいところだが、立ち止まると蚊の大群が押し寄せる。湿地まで降りて昼にする。といつても、ブンブン攻撃を避け立ったまま食べる。初夏の山はどこでもそうだが、一年でも限られた時季の現象だろう。

湿原はもともと田んぼだつたらしいが、いまでは立派な湿原として豊かな生態系の構成要素となつている。途中でストーンサークルのような場面や色が違う草のエリアも見える。湿地を横断すると登りに差し掛かり、さつきの峠に戻る。旧道を経由して港に戻るが、さらに弁財天のある半島に足を伸ばすのももしろい。



最初に出会うイシマササユリ



容姿端麗なイシマササユリ



カベヘラは心が落ち着く場所

集落に戻るとすでに各種のイベントや食関連の催しは終わっていた。
船を待つ間、現場に残っていた実行委員長の神野さんと談笑しつつ伊島をあとにした。



弁財天のある半島



行き止まりの海崖



地蔵峠を過ぎて湿地を見下ろす



自然な姿で自生している



港と集落が見渡せる途中の展望所



森に包まれた観音への散策路



空也上人がたどりついたとされる僧渡浜



集落の暮らしを支えた貯水ダム



「日本の重要湿地 500」にも選定



伊島と答島港を結ぶ連絡船みしま